

昭和二十年八月十五日の終戦後、私は中国軍兵士の自動車教育係として配属され、約一カ年間勤務、昭和二十一年四月二十日、復員船にて博多に上陸、焼土と化した故国に帰ることが出来ました。

私は自動車隊であり、歩兵の方のように第一線勤務ではないので、弾の撃ち合いはしませんが、食糧、弾薬等の補給役として、常に敵機の空襲を受ける危険な業務を行って来ました。

その間、幾多の戦友が爆撃で亡くなられた光景が今でも臉に残って、戦争の悲惨さを思います。そして恒久的平和の尊さを祈るものです。

平成十五年十一月九日、急性心筋梗塞にて入院、十五分遅れたら命が無いとのことでした。幸い一カ月余りで退院し、現在は福祉関係のボランティアとして活動中です。

十三年の両年にわたる大旱魃^{かんばつ}のため、農家の苦悩は一方ならぬものがありました。その明治四十三年のこと、東根北の宿の住人、天野又右衛門は灌漑用水を得ようと旧元湯旅館屋敷の一週に「独鉦^{とこづ}井」の試掘を行った。深度十数間（一間は一、八メートル）に達して豊かな湧水を得た。その温度は相当高く、さらに、掘り下げ、三十二間ほどに及んで温度は四〇度、湯量毎分二斗（一斗は十八リットル）の優秀な温泉が湧き出したのです。

天野家一門の喜びはもとより近郷の民衆もまた驚き、じらい、数多くの人々は天与の恵みを感じ、出湯の恩沢に浴しています。私も年少の頃は米、味噌、野菜を背負って自炊湯治したものです。現在は三十軒の温泉旅館が建ち並び、また東根小学校庭の日本一の大櫓、龍泉寺のマリア観音像、与次郎稻荷神社境内の「六田の石鳥居」、大森山の磨崖仏、仏心寺の大仏等と共に観光客から喜ばれております。

以上私のふる里について紹介しましたが、私の

手榴弾と共に生きる

山形県 菅原喜美

私は、大正十（一九二一）年十二月十七日、現住地で生まれました。入隊当時の家族は父・妻・弟三人の六人家族で、父は農業の傍ら日雇い労働者、私は大阪のガス会社でコークス生産課で働いておりました。上の弟は九歳違いの小学生で、妻は三人の弟が小さいので育児と家事専業でした。

山形と言えば「さくらんぼ」が思いだされますが、私が小さい頃は各家の空き地に一本くらい植えられている程度でしたが、山形産の「さくらんぼ」は味の好きが全国に知れ渡り、現在東根地区は日本一の生産地となりました。

「さくらんぼ」以外にフランス生れの「ラ・フランス」、林檎、ぶどう、桃等四季を通じてどこへ行っても旬の果物が満喫出来ます。

また東根地区は明治四十二（一九〇九）年、四

家はわずかばかりの田畑を耕作する貧農家で、母は末の弟を出産後間もなく死亡しましたので、父は農作業や家事のかたわら暇をみては日雇い作業で六人家族の生計を賄っておりました。私は小学校卒業と同時にこの土地での就職を希望し、職探しに走り回りましたがかなわず、前書のガス会社に就職して、少しばかりですが父に毎月送金して喜ばれておりました。

私が十九歳の春、父から相談したいことあるから休暇をもらって来るようにとの連絡がありました。父の相談事とは、俺の気に入った、しかも俺の家のために働いてくれるという好い娘がいるから結婚しないかとのことでした。母を早く亡くし疲れ切っている父の姿をみて、俺は「来年徴兵検査でどこも悪いところは無く甲種合格間違いないと思う。結婚一年そこそこで軍隊に行き元気で帰って来るかどうか分からないことを承知して来てくれるならいいよ」と返事をしました。

父は早速、家を出て、午後八時頃帰ってきて「喜

美喜べ、俺が目を付けたとおり立派な嫁だ、喜美

さんが兵隊に行っても必ず元気で帰って来ます。

毎日神仏に祈願して帰りを待ちます、と言つて承知してくれたよ、お前が明後日帰る予定なので、

明日先方の家へお邪魔することにしてきたから」

と、時間は十二時とのことでしたので、翌日訪問して来春結婚式を挙げることに決めました。

翌年三月末で会社を退職し、結婚式を挙げ、徴兵検査の結果は予想通り甲種合格となり、昭和十七（一九四二）年十二月一日、入隊するよう役場より通知が届き、入隊まで健康に注意しました。

入隊前日、妻から毎日三食の陰膳を据え、無事帰還を祈っているから、家のことは何一つ心配せず安心して国のため軍務に励むよう元氣付けられ、感謝の涙が止まりませんでした。

いよいよ入隊の日が来ました。朝早くから親戚の方々が我が家にお祝いと元氣付けに集合、必ず元気で帰って来ますので家族のことよろしくお願ひします、と堅い握手をし、家の前から、町内の

皆さんのご厚意による「祝出征軍人 菅原喜美君」の大幟を先頭に駅に向かいました。

駅頭には村長さんはじめ、役場の皆さん、軍人会、青年会、国防婦人会その他大勢の方々が集まり、万歳、軍歌、日の丸の小旗に送られ「一死報国」を誓い駅を後にしました。

途中列車内で一泊、十二月二日午後、留守近衛師団歩兵第一連隊第二部隊に入隊しました。十二月八日、下関港出航、同日金港上陸。十二月十二日、満支国境の山海関を通過。十二月十六日、嵐県東村鎮省第六十九師団独立歩兵隊第八十五大隊第三中隊に編入され、初年兵教育を受けながら警備に当りました。

起床から消灯まで軍人勅諭、戦陣訓、歩兵操典の教育、それに教練、飯上げ、洗濯など班内の業務に走りながらの行動です。腹が空き古兵の残飯で助かりました。入隊前に班内では暴力的制裁のあることを聞かされていて、戦地ではこれは無いだろうと思っていたのは思い違いで、襟布、靴下、

昭和十九年

三月 二日 東村鎮出發

四月 十四日 太原着

四月二十八日 太原出發

五月 三日 浦口通過

五月 四日 江蘇省嘉定着

七月二十八日 嘉定出發、

同日 清浦県黄渡鎮着

昭和十八年十二月一日、第三中隊に編入と同時に上等兵に進級、本日入隊した初年兵の教育係に拝命され、その任に当りました。

昭和十八年十二月二十九日、毛頭作戦に初年兵を引率し攻撃教育中、敵の銃弾で肩から背に貫ける銃創を受け、汾陽野戦病院に入院し治療を受けました。初年兵のことが心配で、軍医にお願いして、今後は中隊の衛生兵の治療を受けることにして十日ほどで退院しました。初年兵の出迎えを受け、全員元気でおり、不幸中の幸いでしたが、多くの死傷者が出たこと知らされ残念でした。

移動中に河南作戦を援助するため参戦するよう下命があり、私の率いる初年兵分隊も突撃の任に当りました。私は敵の榴弾の破片が肩近くの首内に食い込み、多量の出血があり、止血に手間取っていたところ、青森県出身で一年先輩の佐々木上等兵が俺に任せるといい、患部を指で三十分位押さえて出血を止めてくれました。この作戦で、我が分隊は軽傷二人でしたが、激戦でしたので他部隊の死傷者は数百人に及んだと聞きました。

黄渡鎮は治安良く、住民にも反日的行動もなく、また我が軍も住民から反感抱くような行動とるこ

となく平穩に過ぎておりました。

昭和二十年八月十五日、突然、米軍進駐、終戦が報ぜられ、武装解除、兵器の供出をしました。その後米軍の指揮下に入りましたが何の作業も無く三食が仕事でした。私は耳鳴りがひどいので医師の診断を受けたところ、手榴弾の破片が首の骨と接触しており、神経が圧迫されているのが原因ではないかと考えられるとのことでした。手術によって破片を除去するには現地では場所的に問題があるので、日本へ帰ったら専門医師の診断を受けるようにと診断書を戴きました。そして復員後地元の病院での診断結果も同意見で、一年ごとに受診すると言われますが、今も酷い耳鳴りに悩まされながらの毎日です。

昭和二十一年

一月 十七日 帰還のため上海港出航

一月二十一日 佐世保港上陸

一月二十三日 復員帰郷

当時は電話はなく、連絡せずに突然帰りました

ので、妻はじめ家族全員の驚きと喜びで一夜を明かしました。帰宅時刻はちょうど夕食時で、出征前に妻が言っていたとおり、食卓に私の陰膳が据えられておりましたので感謝の涙が止まりませんでした。

思えば戦地での二回の負傷が急所を外れて無事帰還出来たのは妻の祈りのお陰でした。

実は太原駐留時に父の死亡通知があり、隊から一時帰郷の許可が出たのですが初年兵教育期間中でしたので、帰郷は断念しました。私の弟三人の養育のために父はどれほどの苦勞したか頭が下がります。

しばらく静養して営林署の勞務者に採用されました。しかし目的達成前に弟が小学校を卒業しましたので、二人で野菜の商売をやることにして退職し、小型トラック、三輪車を購入、県内、秋田県、青森県と駆け回りました。

現在、苦勞をかけた妻に何の恩返しすることなく先立たれ、わずかばかりの国民年金で細々と、

中支での戦争悲劇

福井県 内田新一

百万人に 百万人の 母あれど

吾が母に 勝る母はなし

という歌がありますが、私にとりましては特に我が母は、誰の母にも負けない立派な母だと信じております。

私が十三歳の時に、父は四十一歳の若さで死亡しました。以来母は十三歳の私を頭に姉二人、弟一人と四人の子供を一生懸命働いて育ててくれました。私達四人にとりましては、何物にも換え難い大切な立派な母でした。

私は大正十三（一九二四）年三月三十日、現在の福井県鯖江市住吉町三丁目一三―二七号で生を享け、鯖江市惜陰尋常高等小学校を卒業し、昭和十三（一九三八）年四月より鎌田印刷所に勤務致しました。昭和十六年十二月八日、真珠湾攻撃に

でも長男夫婦、孫夫婦それに曾孫の四世代同居で和氣霽々の幸せな毎日を過ごしております。